



143

大槌町旧役場庁舎の前
で黙とうをささげ、「お
らが大槌夢広場」の語り
部ガイドツアーは始ま
る。「何があっても逃げ
て」。涙ながらに思い
を訴えるガイドの川端喜
久子さん(66)の声に熱が
こもった。県外から訪れ
た大勢のツアー客も真剣
な表情で聞き入り、前町
長ら職員40人が犠牲と
なった地で涙を流した。
東日本大震災から3年余
がたった今、震災を語り
継ぐ人と思いをはせる人
との出会いがある。

■事業幅広く

おらが大槌夢広場は、
同町を拠点に被災地ツア

ーのガイド事業などを手
がける社団法人だ。町民
向けの「大槌新聞」を週
刊発行して無料配布した
り、大槌に関わる資料を

展示する復興資料館を公
開したりと、幅広く事業
を展開する。
「人を呼び込むことで、
町民の意識やチャレンジ
精神を底上げしたい。全
然違う人と会うことで、
人はがらっと変わるか
ら」と白沢和行代表理事
(29)。全ての事業に通じ
る信条は、町民がさまざ
まな「可能性」を見つけ
るための手助けをする

もまた、目の前で成長し
ていく存在だ。被災後間
もなく地元の人を中心に
動き始め、2011年6
月には母体となる委員会
を設立。同11月には社団
法人として立ち上がった。
一時は25人で運営す
るまでに規模が大きくな
ったが、設立当初から手
がけた「おらが大槌復興
食堂」など今では独立し
て巣立ったメンバーも多
い。

■人をつなぐ

現在は6人で仕事を回

説明する表情には、まち
への愛着と被災の悲しみ
が入り交じる。
語り部ガイドを務めて
1年。始めたばかりの頃
は思いをつましく伝えられ
なかった。「どきどきし
て、足もがくがくで、い
ろんな思いがこみ上げて
…胸がいっぱいになっ
た」と振り返る。慣れる
までは、10人以下の少人
数ツアーでなければ緊張
で引き受けられないほど
だった。
自宅や職場も被災し
た。震災当時を思い出せ

おらが大槌夢広場

「可能性」広げる力に



「何があっても逃げて」。大槌町旧役場庁舎の前で、ツアー客
に思いを訴える川端喜久子さん(左から2人目) 同町新町

こと。新聞での情報提供
も、町外から人を集める
事業もそのためだ。「目
の前で人が変わってい
く」ことが何よりうれし
い。
共に働くメンバーたち
―客に写真を見せながら

ば今も胸が締め付けられ
る。それでも修学旅行生
や企業の研修生ら大勢の
ツアー客を前に、当事者
ならではの言葉を必死に
伝える。「逃げて、命を
無駄にしないで。助かっ
てほしい。その思いが自
分を突き動かしている」
と静かに理由を語った。
もがきながらも、語り継
ぐことで人を変えようと
奮闘する。

応援メッセージ

千葉県松戸市

岩手県北バス東京営業所勤務

宮城 和朋さん(33)

研修ツアーの受け入れ先として企
業に紹介するなど、県北バスはおら
が大槌夢広場の発足当時から一緒に
仕事をしている。経済的な効果だけ
でなく、外から来た人との交流を通



じ、大槌の
人を育てる
ことに目が
向いている
ところがい

い。ありのままを見せ、粘り強く頑
張るまちや人の良さを等身大で伝え
るので、外から来る人にとっても得
られるもの大きい。まだまだ多くの
の切り口がある。地元の人々が地元
に誇りを持つことにさらにつなげて
いってほしい。

得られるもの大きい

震災から3年。白沢代
表理事には関わった一人
一人が成長していく姿は
目の当たりにできても、
「まちづくり」の成果は
なかなか目に見えず、も
どかしさが募る。
「この先もまちは変え
られないのかもしれない」と白沢代表理事。「でも、
少数の人間なら変
えられるかもしれない」
とすぐに続けた言葉に
希望が宿る。「町の人と
育っていききたい。一緒
に生きていきたい」。寄
り添い、人と人をつなげ
て「夢広場」を広げてい
く。
(釜石支局・菅野結花)